

オトナのための日本語塾

レポート集 2015

武庫川女子大学言語文化研究所 編

まえがき

この冊子は、本研究所で開講された「オトナのための日本語塾」に参加した人たちによるレポート集です。

本研究所では、2009年から一般の方と日本語について話し合う会「ことばのサロン」を毎年1回開催してきました。参加者は、研究所の応援組織「LC 倶楽部」の会員たちでした。サロンは、その方たちの「講演会のように受け身ではなく、もっと自分たちが発言できる会合を」という声にこたえたものでした。

「ことばのサロン」では「呼称」「あいさつ」「誤解」など、日常のことば遣いを振り返り、参加者それぞれが、他の人とは違った使用実態や考えを披露しました。それによって、私たちはことばを使う意義の認識を深めていきました。

そのような経験を重ねるうちに、話しっぱなしでいいのかという疑問がわいてきました。また、熱心な参加者に、話し合うレベルを超えてもっと主体的にことばに取り組む道を提供したいと考えました。その結果が「オトナのための日本語塾」だったのです。

2015年5月、言語文化研究所の一室に約15名の人々が集まりました。そこで、私たちは、暮らしの中のことば遣い、テレビや新聞のことばから、近所の立ち話、さらにはネットの中のことばも含んで、私たちの生活にかかわることばすべてを、考察の対象にしました。「ことばの正誤を峻別するよりも、なぜそういうことば遣いをするのかを考えよう」が基本精神です。ですから、いつも正解があるとは限りません。それでも、考えれば、それまでに気付かなかったことも見えてくると信じて活動してきました。

2015年度には5回の日本語塾を開催しました。その成果の一部が、本誌のレポート集となって結実したのです。正直に申しまして、掲載したレポートは、大作、力作から手習いふうのものまでさまざまです。しかし、学生でもなく、まして研究者でもない人々が、ことばと向き合って自分なりの到達点を文章にするという作業をされたのです。そこに大きな敬意を表します。

ただ、それを冊子として世に送ることは、一見大それたことに見えるかもしれませんが。単なる思い出作りの文集に見えるかもしれません。しかし、そうではありません。

ことばは、ことばを使うわれわれ一般の人間のものであり、決して一部の識者や研究者のものではないはずです。みんなが自分たちのことばを考えることにこそ意味があるのです。そこに、生きていく上で必要な、あるいはふさわしいことば遣いがみえてきます。考えることをやめてことばの権威に追従するだけでは、ことばをしゃべるロボット以下の存在になり下がるでしょう。

時はまさに、団塊の世代を中心に時間的、経済的ゆとりをもつ世代が増えてきています。人々は、だれかが金儲けをするための仕込みだらけの趣味や娯楽に踊らされがちです。しかし、そのようなものではなく、すべての人にかかわりのあることばについて考えるほうが有意義です。先行き不安の今こそ、ことばを通して生き方を見つめることが重要です。この冊子が、そうした動きを引き起こす第1歩になることを祈ります。

最後に、このような企画を許可してくださった大学当局に感謝申し上げます。

目 次

まえがき

佐竹秀雄

類義語

上野和美：「むく・はがす・はぐ・めくる・まくる」の使い分けと
日本語学習者への指導・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

加茂 豊：「大事と大切」考・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14

綿田はる子：「だから」vs.「なので」・・・・・・・・・・・・・・・・ 21

流行語

今城公德：「めっちゃ」について・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

宇野秀和：「超～」と「爆～」・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

表記・ローマ字

高田秀峰：ローマ字表記上の問題点・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

アンケート調査

竹腰 純：古典落語の裾野展望・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

「むく・はがす・はぐ・めくる・まくる」の使い分けと 日本語学習者への指導

上野和美

1. はじめに

ボランティア活動で外国人の日本語学習の手伝いをしている。母語話者として意識せずに使っている言葉の意味や使い方を問われ、説明に四苦八苦することも多い。先日欧州出身の女性に「hada [肌]」と「hifu [皮膚]」と「kawa [皮]」の違いを尋ねられ、一応の説明はしたのだが、その中でそれらの名詞の述語となりうる「むける」「はがれる」「めくれる」という動詞の使い分けが気になり、扱いに戸惑った。

最近では、日本語でもスキンケアに関わる用語の「ピーリング」や、調理器具の名称の「ピーラー」といった言葉を耳にすることも多くなったが、そもそも、表面にある物がその下（内側）にある「本体」と分かれることを表す「むける」「はがれる」「めくれる」などの語は、どのように使い分けられているのだろうか。「日焼けをして肩の皮が」というと、そのあとに続く動詞は何が適切なのか、どれも適切なのか、ニュアンスが違うのか、話者の属性によるのか、などの疑問が湧いてくる。さらに「化けの皮」は「～をはぐ」と言ったり、「～がはがれる」と言ったりするが、「はぐ」と「はがす」とでは違うのか。着物の裾は「めく（れ）る」のか「まく（れ）る」のか、朝なかなか起きようとしないう息子の布団は、はいだり、めくったりするが、はがしたり、まくったりはしないのか、などの疑問も生じる。語の持つ意味を動作やしぐさで表そうとすると、どれも似たようなものになってしまう。

以上のような理由で、「表面を覆っている物がその下にある物から離れる」ことを表す動詞の使い分けについて知りたいと思うようになった。そして、さらに日本語学習者にその使い分けを端的に伝えるにはどうすればよいのか、自分なりに整理しておきたいと考えた。

したがって、このレポートでは、他動詞「むく」「はがす」「はぐ」「めくる」「まくる」の意味や使われ方の違いを調べ、日本語学習者にどう伝えるかを考えたい。語がもともと担っている意味をつまびらかにするというよりも、日常生活の中での「棲み分け」を見て、それをまねて日本語学習者が使いこなせるようにするという点に、重きを置こうと思う。自動詞でなく他動詞で比較するのは、自動詞には自然にそのような状態になることを表す場合と、行為の結果として今そのような状態にあることを表す場合とがあるため、無用の混乱を来すかもしれないからである。

ここでは、五語のうち、まず「むく」「はがす」「めくる」の三語の違いを考え、次に「はがす」と「はぐ」との間の、そして「めくる」と「まくる」との間の違いを取り上げたい。最初の段階で、「むく」「はがす」「めくる」の三語に絞るのは、五語を「むく」「はぐ／はがす」「めくる／まくる」の3グループとみなした上で、「はぐ」よりも「はがす」、「まくる」よりも「めくる」の方が日本語学習者にとって基本語であるとの認識からである。また、自動詞で考えた場合に「むける」との意味的重なりが大きいのも「はがれる」「めくれる」と思われるからである。

つまり、「むく」「はがす」「めくる」の使い分け軸、「はがす」と「はぐ」との使い分け軸、「めくる」と「まくる」との使い分け軸の三つを順に見ていく。そのうえで、最後に日本語学習者への伝え方を検討する。

2. 「むく」「はがす」「めくる」の違い

2.1. 国語辞典の記述

まずは、国語辞典でどのように扱われているかを比較する。取り上げるのは、『大辞林』、『大辞泉』、『明鏡国語辞典』（以下、『明鏡』と略す）、『岩波国語辞典』（同、『岩波』）、『新明解国語辞典』（同、『新明解』）、『日本語 語感の辞典』（同、『語感』）の六冊である（詳しくは参考文献参照のこと）。これらの辞典では、それぞれの語について次のような語釈が挙げられている。ただし、ここでは、類義関係にかかわる語釈部分だけを掲げる（以下の語釈も同様）。

【むく】

大辞林：外側をおおっているものを取り去る。

大辞泉：皮・殻など表面・外側をおおっている物を取り去って中身を出す。

明鏡：表面をおおっているものを取り去る。

岩波：内側の物を取り出すため、また内側の物を現すために、それをおおっている外側の物を（はがし）取り去る。

新明解：（中身とは違った状態の）薄い表面を本体から離して中身が現れるようにする。

語感：表面を覆っているものを薄くはがして本体と分離させる意で、会話にも文章にも使われる日常の和語。

【はがす】

大辞林：表面に付着している物やおおっている物を、めくりとる。はぎとる。

大辞泉：付着しているものを剥ぎ取る。めくり取る。

明鏡：表面の物がとれて離れるようにする。はがれるようにする。はぐ。

岩波：本体に付いているもの、貼ってあるものを、そいだりめくったりするようにして離す。

新明解：表面をおおう膜状の（に張りついた）ものを本体から分離させて取り除く。

語感：接触している対象の表面のほうを取り除く意で、会話でも文章でも広く使われる日常生活の和語。

【めくる】

大辞林：①おおっているものを、はいだり、上げたりして下の物をあらわす。

大辞泉：①おおっているものをはがす。②上に重なっているものをはがすように上げる。

明鏡：①覆っているものをはがす。②下にあるものが現れるように、上に重なっているものをはがして取りのける。③はがすようにして裏返す。

岩波：上にあるものをはいで取りのける。

新明解：重なっている物の、上の一枚を端から折り返すように持ち上げて、その下にある物を現す。

語感：表面にあるものを取り除いてその内側が見えるようにする意で、会話でも文章

さらに、「はぐ／はがす」と「むく」との違いに関して、『大辞林』『大辞泉』『明鏡』には、次のような補足説明がある。

大辞林：動詞「剥（は）ぐ」は、毛皮などを力を入れて無理やりに、表面だけでなく、やや深部まで、厚みのある形でごっそりと、面積としても広範囲に取り去る意に用いる。これに対して「剥（む）く」は、果物などの表面の皮を、薄く取り去る場合などに用いる。

大辞泉：「木の皮をはがす（むく）」のように、外側の部分を取り去る意では、相通じて用いられる。◇「はがす」は、表面に付着しているものを取りはずす意。「ポスター（切手・シール・傷口のガーゼ）をはがす」。◇「むく」は表面をおおっているものを取り去って中身をあらわにする意。「りんご（みかん）の皮をむく」「ゆで卵のからをむく」「目をむく」「歯をむく」◇「はがす」と同類の語に「はぐ」がある。「はぐ」は「木の皮をはぐ」「けものの皮をはぐ」のように、「はがす」「むく」と同じように用いられるが、また、身につけているものを取り除く意もある。「掛けている毛布をはぐ」「官位をはぐ」

明鏡：「はぐ」に似るが、「むく」は中身をあらわにすることに注目している。

個々に語を見ていく前に、辞典を調べて感じたことを二点述べたい。一点は意味の説明部分に各語の言い換えが多く用いられているということである。上に挙げた辞典の説明は丁寧だと感じられるが、それでも言い換えによる説明にならざるを得ない部分が認められる。補足説明の部分には言い換えの記述はないが、「はがす」や「むく」という言葉を知らない、あるいは触れたばかりの日本語学習者にとっては、この説明が理解できるくらいなら、最初から辞典など引く必要もない、ということになるだろう。特に「めくる」と「はがす」の説明には互いの語がよく用いられている。

もう一点は、『大辞林』『大辞泉』『明鏡』が「むく」と「はぐ／はがす」の意味の違いについて補足説明している、ということである。これは「むく」と「はぐ／はがす」との間の意味的重なりを大きいと見なしているからだといえる。いずれも「めくる」との違いに関しては記述していない。これは漢字表記が「むく」と「はがす」はどちらも「剥」（「剥く」「剥がす」）であることに関連していると考えられる。「めくる」は「捲」（「捲る」）である。「めくる」と「はがす」の語釈に互いの語が登場するのは、むしろ重なり部分が小さいためだと解釈できよう。

2.2. 「めくる」

これらを前提として、まず「めくる」について考えたい。辞典の記述によると、〈下の物が現れるようにする〉という行為であり、「ページをめくる」「カレンダーをめくる」などが典型的な用例として挙げられる。どちらも〈下にある物の情報を得よう〉として行う動作である。意識が向かう対象は、取り払う覆いの方でなく、取り払われた下の物である。

また、漢字表記が「捲」である点に着目すると、「めくる」というのは取り払う方法が肝腎な語であるといえる。「捲」は「卷」と同源であり、「めくる」は「まく〈roll〉」動作に関わっている認識があるものと考えられる。「まくる」との違いについては後述するが、一般に「めくる」は「まくる」の音変化とみなされている。つまり、『新明解』に「上の一枚を端から折り返すように持ち上げて」という記述があるとおり、〈層状に重なっている上の物を巻くようにして取りのける〉動作といえるだろう。したがって「布団をめくる」は、布団の四隅を持って一斉に離すのではなく、端を持って裏返しにするという動きを表す。お好み焼きやパンケーキを勢いよくひっくり返して裏表を逆にする動作を「めくる」とはいわない。「めくる」は掌を返すイメージである。指の軌跡は半円を描く。一方、ページやカードのように積み重なった物が対象である場合は、「くる（繰る）」という表現も可能であり、何らかの形で転回が関わるという点で「めくる」とのつながりを感じさせる。果物の皮を取り去ったり、甲殻類の殻を取り除いたりする場合も、皮や殻が徐々に裏返っていくというイメージで捉えにくい。「めくる」で表現されない理由の一つだと考えられる。

さらに、「めくる」は、表面が下の物と完全に分離している必要はない。布団は一部でも裏返った状態になっていれば、「めくれた」ということができる。また、「カレンダーをめくる」は、日めくりのように上の一枚をちぎって取り去ることをいう場合もあれば、来月の予定を確かめるために、今月分の一枚を暖簾のように巻き上げた状態に保持することをいう場合もある。

以上のことから「めくる」は、〈下の物が現れるように上の物を端から裏返そうとする〉動作であるといえる。

2.3. 「むく」と「はがす」

次に、「剥」で表される「むく」と「はがす」について見ていきたい。各辞典の語釈によれば、「むく」の担っている意味内容は、〈中身をあらわにする目的でそれを覆っている外側の薄い物を取り去る〉という行為であり、「りんごの皮をむく」「ゆでたまごの殻をむく」などが典型的な用例である¹。「めくる」の対象となり得たカレンダーやカードが「むく」にはなじまないのも、それらはそもそも中身とそれを覆う外側という区別がなく、単に薄い物の重なりと認識されるからである。「りんごをむく」と表現しても「りんごの皮をむく」と理解されるのは、皮そのものより中身に着目しているからだともいえる。派生的な表現の「目をむく」「歯をむく」なども、まさに「目」「歯」といった中身に着目したもので、それを覆うまぶたや唇は問題とならない。

では、「はがす」はどうか。その行為の結果は「むく」と同じく、外側を覆っている物が下の物から取りはずされた状態となるが、中身をあらわにしようとする動作でない点において「むく」と異なる。「ポスターをはがす」という場合、ポスターが貼られていた掲示板や壁があらわになることが大事なのではない。視線はあくまでもポスターが取り去られる

¹ 中身をあらわにする目的でない場合に「むく」を使わないことについては、「貝の殻をむいて、皿にした」や「ガムの包み紙をむいて、折り紙を作った」を不適格と論じた杉本武（2005）を参照。

点に注がれる。つまり、「はがす」は〈表面に存在する薄い物をその下にある物から分離させる〉ことのみを表す。ポスターやシール、壁紙、床板などのような、あとからくっつけた物が「はがす」の対象物となりうるのも、それを裏付けているといえる。

それらは「はがす」の対象物となりうると同時に「めくる」の対象物ともなりうる。が、前述したように「めくる」は、重なっている物の表面を端から返して下にある物が見える状態にする動作であり、「はがす」は表面を覆っている物を移動させ、下にある物と分離する動作である。結果として同じ状態を引き起こすことはあるが、本来、別の行為である。

「シールをはがす」と「シールをめくる」では、前者は単に除去する行為であるのに対し、後者は下に何があるのかを見ようとする行為である。行為を促されてわくわくするのは「シールをめくる」方であろう。カーペットなどの掃除に使われ、「コロコロ」の名称で知られる粘着式のテープにおいても、不要となった一枚をのける意識が働けば「はがす」、新しい一枚に期待する意識が働けば「めくる」と表現するのではないだろうか。

3. 「はがす」と「はぐ」の違い

「はぐ」の語釈を辞典で見てみよう。「むく」「はがす」「めくる」で取り上げた辞典では以下のとおりである。

【はぐ】

大辞林：①おおっているものを、めくるようにして取り除く。②身につけているものを取り去る。脱がす。③奪い取る。取り上げる。

大辞泉：①表面の部分をもむきとる。②身につけているものを無理に脱がして取る。③奪い取る。剥奪する。没収する。

明鏡：①表面をおおっている物や表面に付着している物をむきとる。はがす。②身につけているものを無理に取り去る。はぎとる。はがす。③官位・地位などを取り上げる。はぎとる。

岩波：外側をなすものを本体から引き離すように取る。①表面を、そぐようにして取り離す。②着物をぬがせて奪う。また、その人から官位を取り上げる。

新明解：剥がして（剥がすようにして）、取り除く。

語感：接触している対象を引き離す意で、会話でも文章でも幅広く使われる日常生活和語。ぴったりとくっついている場合に使う「はがす」に対して、表面の一部や接触している物を分離させる場合に用いる。「布団」のような場合はどちらも使えるが、「はがす」ほうが途中経過が意識され、それだけ抵抗がありそうな感じがするかも知れない。

また、『ちがいがわかる 類語使い分け辞典』には「削る・はぐ・はがす・むく」の使い分けの説明の中で「はぐ」と「はがす」に関する次のような記述がある。

「はぐ」「はがす」は表面の薄いものを取り去る意だが、「はぐ」ではそのものの表面の部分を引き離す意、「はがす」では後からそこにくっついたものを引き離す意

が強い。…〈中略〉…「切手を-」のように、くっつけてあるものを取り去る場合は、「はがす」が適当。「はぐ」は、「動物の皮をはぐ」のように、本体の表面の部分を引き離す意識が強く、「切手を-」には使いにくい。…〈中略〉…「早く起きると布団を-」のように布団や着物を無理やり取り去る場合は、「はぐ」「はがす」を用いる。「はぐ」のほうが無理やりにとという感じが強い。

「はぐ」の典型的な用例は「木の皮／動物の皮をはぐ」「着物をはぐ」「官位をはぐ」で、形態的に「はぐ」と「はがす」は同類と認識される。二語の使われ方の差は『語感』によると、「はがす」の方が、対象物が「ぴったりとくっついている」感じがし、引き離す際の「途中経過が意識され」ということである。

一方、『ちがいがわかる 類語使い分け辞典』では、「はがす」は「後からそこにくっついたものを引き離す意」で「はぐ」は「本体の表面の部分を引き離す意識が強」と説明している。どちらも、「はがす」を〈くっついたという付着の意識のある物の引き離し〉で、「はぐ」を〈一部の引き離し〉と捉えている点は共通している。着目すべきは、布団における「はがす」と「はぐ」の無理やり加減である。前者は「はがす」の方が「抵抗がありそうな感じがするかも知れない」としているのに対し、後者は「はぐ」の方が「無理やりにとという感じが強い」としている。一見、逆のようであるが、必ずしもそうでない。「はぐ」の方が、もともとの一体感の強い物に対して使われる傾向にあるというだけのことである。まさかそれが引き離されるとは思わなかった、という物だからこそ暴力的と感ずることもあれば、付着した（程度の）物だからこそ引き離す様子がイメージしやすく、そのために却って経過が強調されて暴力的と感ずることもある。『語感』の「かも知れない」といういささか弱気な文末表現も、それを物語っているのではないだろうか。

さらに、「はぐ」と「はがす」の違いについては、杉本武（2005）も「本体と付着物の関係の点から記述するか、動作の際に加えられる力の点から記述するか、用例が限られることもあって明らかではない」と述べている。動作そのものが担う意味の差をこれ以上追究することは困難であり、また深追いしても実際的でないだろう。ここではさしあたり、「はぐ」は「はがす」と違い、特定の物を対象として表現する場合が多く、現在は慣用句のような使い方が少なくない、ということを確認しておくにとどめたい。

4. 「まくる」と「めくる」の違い

これまでと同様に辞典で「まくる」の語釈を見てみよう。

【まくる】

大辞林：①端をまいて上げる。また、はぐ。②紙などを裏返す。めくる。

大辞泉：①物の端を外側へ巻きながら上へあげる。②おおっているものや重なっているものをはがす。めくる。

明鏡：①覆っている物を端から巻いて上へあげる。また、覆っている物をはがす。めくる。*「腕を-」「尻を-（＝急に反抗的になる）」のように、覆っている物をはがして体の一部を外に表す意でも使う。

岩波：①覆いとなっているものを、一方に片寄せてあげる。②覆われているものを現

し出す。

新明解：隠れている部分が見えるように、端の方から（身に着けている物を）折り返す。

語感：覆っているものを端から裏返す意で、会話でも文章語でも広く使われる日常生活の和語。いくつも重なっている場合に使う「めくる」とは違い、覆っているものを折り返して内部を露わにする意に用いる。

先にも触れたが、もともと「めくる」は「まくる」の転じた語であると見られ、『精選版日本国語大辞典』では「まくる（捲）の変化した語」、『広辞苑』でも「マクルの訛」とある。したがって、本来担う意味の違いをたどっていくことは、「はがす」と「はぐ」と同様、明らかにしにくいと考えられる。ここでは、使われ方の特徴を捉えるにとどめたい。

「まくる」は、対象となる物が非常に限られ、「はぐ」以上に特定の物に対して使われる。典型的な用例は「腕（／袖）をまくる」「裾をまくる」であり、特に衣類のような布が上方に折り返される場合に多く使われる。「めくる」との棲み分けが生まれて、そのような形で残っているとも考えられるが、それについての真相はわからない。「めくる」との違いに関し、『明鏡』に次のような記述がある。

「まくる」は「腕〔尻〕をまくる」のように、覆っている物をはがして体の一部を外に出す意があるが、「めくる」にはない。

確かに「腕をまくる」「尻をまくる」のように、体の一部をあらわにすることには「めくる」に置き換えがきかない。腕や尻をまくる場合、単に覆っている物を巻き上げて下の物を出すというのではなく、威勢をつけて意気込むさまを表す場合がある。その際は、比喻表現と捉えられる。また、腕や尻は「まくる」という動作を行った結果、外にあらわれ出たのであり、巻き上げる対象はあくまで衣服である。このような、ある種の特殊表現をとることも「まくる」の対象が限定的になりがちであることと無関係ではないだろう。

一方、裾や袖なら「めくる」も「まくる」も両方使える。しかし「着物の裾をめくる」と「着物の裾をまくる」では、想起されるものに差がある。裾のほつれを見るような場合が「めくる」で、悪路を進むような場合が「まくる」ではないだろうか。「めくる」が〈裏を返す (turn over)〉という意識であるのに対し、「まくる」は、〈巻き上げる (roll up)〉という意識である。言い換えると、「まくる」は筒状になったものの覆いを、端から折り返すように上げようとする動きであり、「めくる」は平らな物を端から裏返そうとする動きである。「着物の裾をまくる」ときには人間の体が、「ズボンの裾をまくる」ときには脚が、それぞれ筒状と認識されるのであろう。これは平面であるシールやページに「まくる」が使われないこととも合致する。

もう一点、「まくる」の特徴として、上方へという方向性が挙げられる。袖や裾を「まくる」のは上の方への折り返しである。タートルネックの襟を折り返したり、ハイソックスをずり下げたりするのに「まくる」は使わない。「めくる」にはこのような方向性の制限はない。

5. 日本語学習者への伝え方

5.1. 五語の意味と特徴

はじめに、これまで見てきた「むく」「はがす」「はぐ」「めくる」「まくる」の五語について意味の重なりを確認しておきたい。

- ① 表面を覆っている物を、何らかの物理的方法で取り払おうとする動作である。
- ② 下（内側）の物から分離させようとする物は、薄い面状の物であり、その動作の過程においても面という状態は保たれる。

つまり、辺り一面降り積もった雪や、覆い尽くすように生い茂った雑草、頬や顎を覆うように生えた髭などを除去することは、これらの五語では想定されていない。当たり前と思われるかもしれないが、日本語学習者にとっては決してそうではないので、指導の際には注意する必要がある。

次に五語の持つ意味と特徴を簡単に整理しておきたい。

- むく〈剥く〉：中身をあらわにする目的のために、それを覆っている外側の薄い物（皮や殻、莢）などを取り去る動作を表す。中身（があらわになること）が大切な動詞。
- はがす〈剥がす〉：表面を覆っている付着物を移動させて、下にある物と分離する動作を表す。ぴったりくっついていた物が分離するという経過が意識される動詞。
- はぐ〈剥ぐ〉：本体にある表面部分を引き離す動作を表す。「はがす」と同源で、実際には使う場面が限られて特定の表現になりがちである。
- めくる〈捲る〉：下の物が現れるよう、重なっている物の上を端から裏返す動作を表す。掌が返るような様態が意識される動詞。「まくる」から転じた語。
- まくる〈捲る〉：筒状になった物の覆いを、折り返すように巻き上げる動作を表す。衣類から体の一部が外に出る場合に多く使う。

5.2. 「むく」「はがす」「めくる」の指導

最後に、これらをふまえた上で具体的に「むく」と「はがす」「めくる」について、日本語学習者への導入・説明のしかたの案を示したい。「はぐ」と「まくる」については使用場面が限られ、レベル的にも三語を理解し使用できるようになってから獲得する、超上級レベルの語と考えられるので、上記の説明に用例を加えたもので間に合うと思われる。

N1 から N5 の五段階で日本語能力を測る日本語能力試験の受験対策教材では、「むく」は N3 〈日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる〉レベル、「はがす」はそれより一つ上級の N2 〈日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる〉レベル、また、「めくる」は最も上級の N1 〈幅広い場面で使われる日本語を理解することができる〉レベルの語として扱われている。教材によって取り上げている言葉が違うため差もあるが、おおよそ「むく」は N3 の中級、「はがす」は N2 の中級後半、「めくる」は N1 の上級での獲得を目指す語と捉えられる。それをもとに、「むく」は具体的な展開例を、「はがす」「めくる」は説明に使える道具や活動例を、導入の案として示したい。

【～を むく】

意味：外側の皮を取る。表面の薄い皮を取る。〈peel /pare/shell〉

分類：I グループ（＝五段活用）・継続動詞

マス形「むきます」 テ形「むいて」

導入のしかた

皮がついたままのバナナの絵とむいた状態のバナナの絵を用意する。まず、皮がついたままのバナナの絵を見せ、「バナナです。」「食べたいです。」と言う。「皮をむきます。」と言ったあと、皮がむかれた状態のバナナの絵を見せ「皮をむきました。」と言う。これによって、皮の変化をもたらす動作が「むく」であることを伝える。再度、動作で示しながら「皮をむいて食べます」と言う。

会話例〈ロールプレイ〉

A：「りんごを食べるとき、皮をむきますか？」

B：「むきます／むきません」

A：「むいて食べるんですね。／むかないで食べるんですね。」

A：「オレンジはどうですか？ 皮をむいて食べますか？ 二つに切って食べますか？」

B：「切って食べます。皮を（／皮は）むきません。」

他の用例：「みかんの皮をむく」「じゃがいもの皮をむく」

留意点

- ・ 道具を必要とするかどうかは関係がないことを理解させる（英語では異なる）。
- ・ 発展形は「えびの殻をむく」「ゆでたまごの殻をむく」などであるが、殻の場合は「割る」「外す」など、他の動詞も取り得ることを念頭に置く。
- ・ みかんは手でむく物の例として、身近でわかりやすいと思われるが、薄皮（＝袋）もあることを念頭に置く。

【～を はがす】

意味：貼ってあるものを取る。くっついている表面を取る。〈peel/strip/take off/remove〉

分類：I グループ（＝五段活用）・継続動詞

マス形「はがします」 テ形「はがして」

導入のしかたの例

- ・ 購入した商品に付いている値段のシールや、封筒に貼られたセロハンテープを見せ（または、想定し）て、「はがします。〇〇をはがします。」と言い、動作を見せる。
- ・ 教室であれば、壁に貼ってある物（または、予め貼っておいた物）を示して、「これは、もう古いです。はがします。〇〇をはがします。」と言い、動作を見せる。
- ・ 箱に入った荷物を取り出す場面を想定し、「箱を開きたいです。箱にガムテープが貼ってあります。ガムテープをはがします」と言い、動作を見せる。
- ・ シールやテープを貼る場面を設定し、貼った場所や貼り方が適切でないために貼り直す〈貼る→はがす→貼る〉状況を見せる。（プレゼントの包装など）

他の用例：「ポスターをはがす」「壁紙をはがす」。

留意点

- ・ 掲示物で見せる場合、マグネットや押しピンで留めてある物を使うと「外す」との混

同が生じるおそれがある。

- ・ 動作を見せる場合は、「はがす」が垂直方向の分離にも水平方向にも分離にも使えることを念頭に置く。
- ・ 下にある物を見るための行為である「めくる」との混乱が生じないように、取り外したあと（ポスターはがしたあとの壁紙や、シールをはがした台紙）には、何もない状態にしておく。

【～を めくる】

意味：下にある物を見るために、上にある物を裏返す。〈turn over〉

分類：I グループ（＝五段活用）・継続動詞

マス形「めくります」 テ形「めくって」

導入のしかたの例

- ・ 教室であれば、カレンダーを示し、それをめくる必要がある状況（「来月は祝日がありますね。いつですか?」「来月の九日は何曜日ですか?」など）を作って、「カレンダーをめくります。」と言い、動作を見せる。
- ・ 絵カードや単語カードを使って、「めくります。カードをめくります。」と言い、動作を見せる。
- ・ テキストを使って「ページをめくります。」「ページをめくってください。」と言い、その動作を見せたり、促したりする。
- ・ 学習者の年齢や属性、人数によっては、トランプや花札を使った遊び、指示の書かれたカードを使ったゲームなどを通して、定着をはかる。

他の用例：「新聞をめくる」「アルバムをめくる」「書類をめくる」

留意点

- ・ 本のページなどは「開く」という表現もあることを念頭に置く。
- ・ 動作を見せる場合は、「はがす」と同様、「めくる」が垂直方向の分離にも水平方向にも分離にも使えることを念頭に置く。
- ・ 下の物を見るための行為であることを伝えるため、下（裏）には学習者が興味を持つ内容がかかっているようにしておく。

6. おわりに

「むける」「はがれる」「めくれる」という自動詞の使い方について疑問が湧いたことをきっかけに、ここまで「むく」「はがす」「はぐ」「めくる」「まくる」の意味や用法を調べてきた。使い分けに関して新しい観点を示すなどにはおよそ至らないが、辞典の語釈や論文などの情報によって自身の中で整理することができた。

日焼けをした肩の皮は、「むけた」といえば（新たな状態の）肩が現れたという点に視線が注がれ、「はがれた」といえば皮が離れていく経過に視線が注がれ、「めくれた」といえば皮の下がどうなっているのかに視線が注がれている、とそれぞれ解釈できる。

日本語学習者に違いを尋ねられたときに困らない程度の用意はできたのではないと思うので、ぜひ実践に活かし、少しでもうまく伝えられるよう努力したい。

〈参考文献〉

- 松村明編（2006）『大辞林』第三版、三省堂
- 松村明編（2012）『大辞泉』第二版、小学館
- 北原保雄編（2003）『明鏡国語辞典』初版、大修館書店
- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（2000）『岩波国語辞典』第6版、岩波書店
- 山田忠雄ほか編（2011）『新明解国語辞典』第7版、三省堂
- 中村明（2010）『日本語 語感の辞典』、岩波書店
- 杉本武（2005）「動詞の意味分析：『はがす』と『むく』」、『文芸雑誌研究 言語篇』（筑波大学 大学院人文社会科学部研究科 文芸・言語専攻）、第47号
- 松井英一編（2008）『ちがいがわかる類語使い分け辞典』、小学館
- 小学館国語辞典編集部編（2006）『精選版 日本国語大辞典』、小学館
- 新村出編（2008）『広辞苑』第六版、岩波書店
- 倉品さやか（2010）『日本語単語スピードマスター STANDARD2400』、Jリサーチ出版
- 倉品さやか（2012）『日本語単語スピードマスター INTERMEDIATE2500』、Jリサーチ出版
- 倉品さやか（2012）『日本語単語スピードマスター ADVANCED2800』、Jリサーチ出版
- 国際交流基金（2011）『文字・語彙を教える』（日本語教授法シリーズ第3巻）、国際交流基金

「大事と大切」考

加 茂 豊

1. はじめに

新聞を読んでいて、ひっかかることばがある。「大事」と「大切」である。これら二つのことばを、記者はどのように使い分けているのだろうか。

オトナのための日本語塾で、「大事と大切は、類義語です」と教えられ、萌した疑問へ迫ってみることにした。

2. 類義語（既刊書籍からの抜粋）

まず、類義語に関する考え方について、先行研究をもとに整理した。

(1) 類義語とは：『類義語の研究』、刊行のことば

同じ意味を表わすのにいくつか違った語のある場合がある。しかし、それらは厳密に言えば、使用場面の違いやニュアンスの違いなどがあって、全く同じ意味の語ではないかもしれない。また、意味がかなり近似しているが、少しずつれているという場合もある。このようなものを普通、類義語と呼んでいる。

(2) 類義語の分類：『類義語辞典』、P6

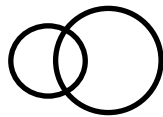
A 一方が他方にふくまれるもの

「教師」はすべて「先生」であるが、代議士や医者「先生」は「教師」とはいわないから、「先生」のほうが範囲が広く、「教師」はこれにふくまれることになる。



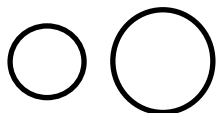
B 部分的にかさなりあうもの

「つくえ」と「テーブル」では、同じものをさすこともあるが、日本式のすわりづくえや、食堂のテーブルのように、他方ではさせないばあいもある。



C かさならないもの

術語として厳密な意味でつかわれるばあいには、はっきりした使いわけがあつて、おなじ現象をさすことがないのに、日常のことばではルーズに使われて区別があいまいだ、というものもある。「駐車」と「停車」、「音韻」と「音声」など。



(3) 類義語における意味と語感：『類義語の研究』、P3

まず、類義ということばの示すとおり、意味の方面が中心の課題にすえられるが、意味といっても、その語の内容を形づくる中核となる概念のほかに、ことばはすべてその語の周辺にただよう気分的なものを必ず伴っている。通常語感とよばれるものであるが、これがコミュニケーションで果たす役割は、中核的な概念に劣らず大きい、というよりもこの両者はわかちがたく結びついているものなのである。

3. 用例の収集

次に「大事」と「大切」の用例を、毎日新聞（2015年）と日本経済新聞（2016年）から、無作為に各50ずつ計100例、収集した。それらの各用例について、①意味、②その対象となるもの、③対象がモノ(m)かコト(k)か、それ以外(s)か、④「大事」あるいは「大切」との置換可能性、⑤地文/会話の区分、⑥掲載日を調査・記録した。

その用例一覧表のサンプルを次に示す。

No	用例	意味	対象	モノ/コト	置換	地/会	掲載日
1	池田さんは「両陛下の訪問を境に日蘭間に基本的な和解が成立しました。この関係を維持していくことが大切です」と話している。	4	関係を維持していくこと	k	○	会	15/7/18
2	これまでの最低は2011年1月スタートの「大切なことはすべて君が教えてくれた」（戸田恵梨香、三浦春馬主演）の12.1%で、これを2ポイント余り下回った。	4	こと	k	○	会	15/7/23
3	一時は「自分が生きていてよいのか」と思い詰めたが、社会人になり、仕事に打ち込む中で「移植の事実を忘れないことが大切」と思うようになった。	2	移植の事実を忘れないこと	k	○	会	15/7/23
4	大木になれなかった木の命が鉛筆の命になったんやけ、大切にに使わせてもらわね。	4	木の命	m	○	会	15/7/23
5	研究者が市民に火山の知識を深めてもらう活動をするのは大切だと思っている。	1	活動をする	k	○	会	15/7/23

4. 用例における分析

4.1. 意味による分類結果

「大事」と「大切」の各用例について、どのような意味で使用されているかを分析した。「大事」「大切」それぞれの意味を、『日本国語大辞典』第二版（2001年）によって次のような項目で分類した。

【大事】

- 1 (名)重要で、根本にかかわる事柄。大事件。大事業。
- 2 (名)仏語。修行して悟りを開くこと。出家すること。

- 3 (名) 寺院や法流にとって重要な修法や作法。
- 4 (名) 芸芸などの真髄やそれにかかわる大切な事柄。芸道における秘伝、秘事など。
- 5 (名・形動) 困難なこと。手ごわいこと。また、そのさま。
- 6 (名・形動) 危険なこと。生死にかかわる一大事。また、そのさま。
- 7 (名・形動) 命にかかわるほど病気や傷が重いこと。危篤。重傷。また、そのさま。
- 8 (名・形動) 不都合なこと。いけないこと。さしさわり。また、そのさま。
- 9 (形動) かけがえのないものとして大切にすること。また、かけがえのないさま。
- 10 (形動) 評価して心にとめるべきさま。重要で根本にかかわるさま。「大事な点」など。

【大切】

- 1 (名・形動) 緊急を要すること。危険や災難などがさし迫っていること。捨てておけない状態であること。また、そのさま。
- 2 (名・形動) 一番必要で重んずべきものであること。貴重であること。肝要であること。また、そのさま。
- 3 (名・形動) すぐれていること。立派であること。また、そのさま。
- 4 (名・形動) 心を配っていいねいに取り扱うこと。大事にすること。かけがえのないものとして心から愛すること。また、そのさま。
- 5 (名・形動) 愛。愛情。特にキリスト教でいう他者への無限の愛。

この分類によって、「大事」と「大切」の用例を整理した結果は、次の表 1、表 2 のようになった。

表 1. 「大事」の意味別統計

10 評価して心に	68 例
1 重要で根本に	15
9 かけがえのない	14
8 不都合なこと	2
6 危険なこと	1
計	100

表 2. 「大切」の意味別統計

2 一番必要で	58 例
4 心を配って	32
1 緊急を要する	8
3 すぐれている	2
計	100

まず、「大事」、「大切」の両語とも、毎日新聞、日本経済新聞において、50 の用例を約 10 日間の記事から収集できた。両語の記事への頻出度は、同程度だと思われる。

次に「大事」では 5 種類の意味項目に該当するものが出現した。そのうちの上位 3 種類で 97% を占める。それに対して、「大切」は 4 種類の意味項目に該当するものが見られたが、こちらは上位 2 種類で 90% を占めた。

これらの上位グループの間で、意味内容を比較すると、「大事」と「大切」の両語は、類義の関係にあることが分かる。なぜならば、「大事」の意味を説明するため大切が使用され、「大切」の意味を説明するため大事が使用されている。

また、「大事」には、「修行して悟りを開くこと」などの意味があり、「大切」には、「す

ぐれていること’などの意味があり、互いに相違する意味をもっている。

従って、「大事」と「大切」は類義語であり、「B 部分的にかさなりあう」タイプに分類されると言えよう。

4.2. 置換可能性による結果

「大事」と「大切」のそれぞれの用例において、「大事」の場合は「大切」に置き換えられるか、また、「大切」の場合は「大事」に置き換えることは可能か、という観点からチェックした。

例えば

(1) 白鵬と並んで1敗を守った鶴竜は「一番一番が大事。相撲を取れる喜びを味わいたい」。
の「大事」は「大切」に置き換えて「一番一番が大切」としても意味もニュアンスも変わらない。それに対して、

(2) 過去3度の核実験を行っているが大事には至っていない。

の「大事」は「危険なこと」を意味し、「大切」に置き換えることはできない。

他方、「大切」については、

(3) 「子どもたちには、道具を大切にすることや時間を守ることを教えた」。

の場合は「道具を大事にする」と「大事」に置き換えることが可能である。しかし、

(4) 指導者となり、基本の大切さを再認識しているところだ。

の場合には、「基本の大事さを再認識する」というのは、やや無理があると考えた。

以上のようにして、各用例で置換が可能かどうかを、筆者が判断した。判断には異論を指摘されるものもあろうが、筆者の語感にもとづいて判定した結果を、次の表3、表4として示す。

表3. 「大事」の「大切」への置換

	可能	可能な率
10 評価して心に	64 例	94.1%
1 重要で根本に	10	66.7
9 かけがえのない	13	92.9
8 不都合なこと	0	0.0
6 危険なこと	0	0.0
	87	87.0

表4. 「大切」の「大事」への置換

	可能	可能な率
2 一番必要で	54 例	93.1%
4 心を配って	30	93.8
1 緊急を要する	5	62.5
3 すぐれている	0	0.0
計	89	89.0

「大事」から「大切」へ置換可能なものは、上位3項目までなら97例中の87例で、比率にすると約90%である。また、「大切」から「大事」への場合は、上位2番までで90例中84例で約93%である。

4.3 収集した用例の結果

「大事」の用例はほぼ3種類の意味に集中し、「大切」では2種類の意味に集中していた。また、置換可能性も非常に高かった。すなわち、「大事」と「大切」とが、同じ意味（または近似した意味）で使用され、かつ置換できる場合が大勢である。

新聞読者が「二つのことば、「大事」と「大切」を記者はどのように使い分けているのだろうか」との疑問をもつことは、自然の成り行きである。しかし、今回の結果からは、両語を記者が使いわけている理由は、分明にならなかった。

5. 考察

『類義語の研究』P277によれば、「類義語は、その中核をなす意味の面でも、意味にまつわる語感の面でも、互いに少しずつ違うところがあり、使用者の側からいえば、これが類義語の使い分けになる。この使い分けのしかたには、年齢・教養・性などによって相違する点はあるにしても、社会一般に共通する部分がある。それと同時に個人によってかなりずれているところがある。類義語の性格がこういうものだという事は、常に念頭におかなければならないことだろう。」とあった。

ここにいう「社会一般に共通する部分」とは、大昔からの日本人の言葉の集積（口語と文語）を調査・分析して得られる結果であり、「大事」と「大切」の両語に限っても、相応の結果を得るためには大きなエネルギーが必要となる。そのうえに個人の属性によるずれが加わって、ことばの使い方は千変万化する。ことばを選び表現することは、表現対象をわが手に掴まえて、自分の知覚・感覚通りに、他者へ伝えようとする人間の営みであるのだから。

類義語の意味の方面では、永年にわたる先人の努力によって、社会一般に共通する部分が究極に近くまで解明されている。今回取り上げた「大事」と「大切」の両語について、市の図書館にある限りの辞典・参考書を読んでみて、意味がかさなりあう部分とはみ出す部分とは、ほぼ截然としている。『日本国語大辞典』に整理された「大事」と「大切」の意味内容がその一例である。

他方、類義語の意味にまつわる語感の方面は、なかなか一筋縄では行かない。筆者が置換可能と判定した用例について、記者が「それでは気持ちが伝わらない」と異議を唱えることは十分に予想される。また置換不可能と判定した用例について、記者がどのような語感に惹かれてことばを選んだか、言い当てることは難しい。

『日本語 語感の辞典』P1174によれば、「ことばがかもしだす雰囲気、ことばとともに伝わる感じ、そう表現することで相手に与える印象としての語感は、一中略一 三つに大別できる。表現する〈人〉に関する語感と、表現される〈もの・こと〉にかかわる語感と、表現に用いる〈ことば〉にまつわる語感の三つである」として、語感体系表が作られている。そこでは、〈人〉に関する 23 項目と、〈もの・こと〉にかかわる 11 項目と、〈ことば〉にまつわる 21 項目の合計 55 項目が挙げられている。

〈ことば〉にまつわる語感として、「連想」の項目に、語源の想起が書かれている。ここで、大事と大切の語源を調べてみた。

大事 祭祀や戎事をいう。[春秋左氏伝]國の大事は祀と戎とに在り。祀に執膳しつばん（祭肉を頒つ礼）有り、戎に受脰有り。神の大節なり。（白川静『字通』）

大切 重要なこと、大事にすること。もとは大いにせま切る（迫る）の意で、漢字表記「大切」

を音読みした和製漢語。『今昔物語集』の「某が大切に可申き事有りて参りたる也」は緊急を要するさま、切迫するさまの意。平安末期には、捨てておけない、肝要なさまの意でも用いられ、さらに中世には、大事にすること、かけがえのないものとして心から愛するの意も生じた。なお、『日葡辞書』では「大切」を愛と訳している。(山口佳紀編『暮らしのことば 新語源辞典』)

以上から、大事は漢語であり、大切は和製漢語で、語源の出自が異なっている。

「大事」と「大切」とを使い分けるとき、筆者には、語源の連想が働きそうである。では、新聞記者が記事を書くときはどうか。語感に関する 55 項目のうち、一つが語源の想起である。記者はことばの意味を考え、さらに語感を斟酌しながら推敲し、そして「大事」と「大切」を使い分けしている。選びとられたことばは、記者の脳細胞にある遺伝子にまで源をたどることになり、ことばを選んだ記者自身でさえ、その理由を説明することは容易ではない。読者は記事を読み、文脈のなかで用いられたことばを自分なりに感得するのみであって、記者の意図を解明することはできない。

6. むすび

レポートを書きながら頭に浮かんだことを記して、むすびとしたい。

- ・大事と大切について、多くの辞典類に目を通した。広辞苑の編集方針に「この辞典は、国語辞典であるとともに、学術専門語並びに百科万般にわたる事項・用語を含む中辞典として編集したものである」とあって、中辞典の表現に驚いた。わが本棚の広辞苑第三版机上版1989年11月発行は、家で一番分厚く重く大きい辞書だから。また、辞典類の「まえがき」を読んで、それぞれの辞典の違いを知ることができた。これまで、折角の情報を見逃がしていたと反省している。
- ・「物事」を広辞苑で調べると、「物と事。一切の事物」とある。辞書の説明通り、この世の物事は、物と事の2種類だとぼんやり筆者は考えていた。ところが、今回の「大事」用例の一覧表において、対象区分欄では、大事が対象とするものを、物：m,事：k,その他：s と3区分した。物でも事でもない対象があつて、「その他：s」を設ける必要があつた。例えば、こころは、物でも事でもない。ひとつの錯覚に気がついて、嬉しい。
- ・今回の調査で、200の用例について表現主体の男女区分を設けていた。「大事」では女性が18人、「大切」では女性が17人である。他は男性であり、それぞれ82人と83人となる。毎日新聞と日本経済新聞の記事を、作為なしにピックアップした結果が用例一覧表になっている。取材源が大きく男性に偏っている。マスコミの一面が表れていると思う。
- ・西宮市鳴尾図書館での「摂津名所図会を読む」会に、筆者は参加している。オトナのための日本語塾とも共通することは、欲得なしのお勉強。これが楽しくて、有り難い。
- ・コラム「女の気持ち」(毎日新聞 2016.2.23)に掲載された、「笑顔の節約生活」と題する投稿の末尾。「大切なだんなさんを大事に思うことも忘れずに」を発見。両語の使い分けは気にならず、スラスラ読むことができた。感謝。

〈参考文献〉

- 国立国語研究所報告（1965）『類義語の研究』、秀英出版
徳川宗賢・宮島達夫編（1972）『類義語辞典』、東京堂出版
中村明（2011）『日本語 語感の辞典』、岩波書店
白川静（2001）『字通』、平凡社
山口佳紀編（2008）『暮らしのことば 新語源辞典』、講談社

「だから」 vs. 「なので」

綿田 はる子

1 はじめに

日本語塾の授業で、ある人が、児童の作文指導に際して『『なので』と書かずに『だから』と書くように注意しています』と話された。それに対して、私はなぜだろうかと思った。私はEメールやメモ的な手紙で読点、句点のあとに、「なので」を使って書き続けることがある。

「だから」と「なので」には、「だから」は硬い感じで、「なので」は軟らかい感じという違いがあると思う。しかし、そうした印象だけでは明確な違いを説明したことにはならない。

なので、「だから」と「なので」の使い方の違いを調べて、証拠つきの説明ができるようにしたいと考えた。

2 「だから」と「なので」

最近までは、読点や句点のあとに、「なので」から始めることはなかったように思う。見たことも聞いたこともなかったように思う。つまり、新しい用法が生じて、「なので」という接続詞が成立したということらしい。

接続詞の「だから」は、「〇〇だから」に由来し、「から」は理由・原因を表す助詞である。それに対して、「なので」の場合は「〇〇なので」に由来し、「ので」も理由・原因を表す助詞である。したがって、意味の上では「だから」も「なので」も同じ役割を果たしていることになる。

こうしたことから、両者の違いは意味の問題ではなく、使い手や場面・文脈にポイントがあるのではないかと考えた。両者の使われ方の違いとしては、私の経験から次のように予想した。

「だから」は中年以上の男性がよく使う。それに対して「なので」は中年以下の女性が使う。また、「なので」は新聞や一般週刊では使われないが、女性週刊誌と対談、インタビューなどの話しことばでは使われているのではないか。ただし、街の人の話しことばには使われないであろう。

3 調査の概要

自分の身の回りで見や耳にする「だから」と「なので」を集めて、その使われ方の実際を調べてみることにした。

調査対象は、話しことばに関しては、ラジオ、テレビ、街なかで私が耳にしたものである。一方、書きことばは、女性週刊誌、一般週刊誌、新聞、小説家を目指す人たちの作品集を対象とした。期間は2015年9～11月である。

4 用例分析

「だから」については18例、「なので」については、19例を採取できた。これらについて、お互いに言い換えが可能かどうかという点から検討してみる。

4.1. 「だから」から「なので」への言い換え

言い換えが可能だと判断したものは、18例中8例で約44%であった。次のようなものである。

- (1) 4～5m 先の人に伝える。だから、お腹から声を出して…【コーラス指導・男性】
- (2) 「…相手によく思われようとお芝居しますもの」「だから、いいことを教えてあげるっていつてるの」【小説・女性のセリフ】

いずれも、話しことば的なものであり、理由付けが、客観的な説明というよりは、感情や気持ちといった主観とかかわっているようだ。

他方、言い換えを不可と判断したものは、次のようなものである。

- (3) 地震は100から150年間隔で起きています。だから、季節ではなく、年のスパンで注意が必要…【ラジオ・男性】
- (4) ここで必要なのがアクセント。だから、ハシ、ハシで意味が違うでしょう。【講演（録音）・男性】
- (5) 教師か親が厳しく教えれば、こうはならないはずである。だから、半面でまっとうなイスラム教徒に…【新聞・論説・女性】

こちらは、どちらかという、客観的に説明・解説しようとする文脈のものが多かった。

4.2. 「なので」から「だから」への言い換え

言い換えが可能と判断したものは、19例中13例あった。少し例を挙げておく。

- (6) ユダヤ教徒もキリスト教徒も殺してはいけない。なので、イスラム国は…【テレビ・男性】
- (7) ご飯のときに米粒ひとつ残さないで食べるように言われて育ちました。なので、今でも食べ物を残したり…【教会の説教・男性】

言い換え可能な割合は約68%で、かなりの場合が言い換え可能であったことになる。

残りの6例を言い換え不可と判断した。例を挙げると次のようなものである。

- (8) とっても可愛らしいですね。なので、使うのが楽しみです。【ラジオ・女性アナ】
- (9) 「『あの件は大丈夫だった？』と気にかけてくれるんです。なので、本気でほれてしまう…」【週刊誌・対談記録・女性の発言】
- (10) メッセンジャー、今日はふんばりどころですよ。なので、今日は頑張ってほしい。【ラジオ・野球解説・男性】

いずれも感情的な文脈で述べられている。このほかの用例も、いずれも話しことばで、やはり主観的なものが多かった。

5. まとめ

「だから」から「なので」の言い換え可能な割合が約44%に対して、「なので」から「だから」への言い換えが可能が70%近いということから、「だから」のほうがより一般的な用法だと言えよう。

また、「だから⇒なので」が可能な用例と「なので⇒だから」が不可の用例では、主観的な文脈のものが多かった。

「だから」と「なので」の用法に関して、「なので」は客観的描写の場合に用いて、主観的な表現の場合には用いないとされている。ただし、主観的な表現の場合であっても、「だから」を使うと押し付けがましさを感じさせることがあり、それを避けるために「なので」を使うことが行われるともいう。

そこで、採集した用例について、改めて、文脈が主観的か客観的かという点と、発言者の性別で整理してみると、次のようになった。

	全体	主観的	客観的	性別		
				男性	女性	不明
だから	18	6	12	12	4	2
なので	19	8	11	12	7	
合計	37	14	23	24	11	2

本来使わないはずの、「なので」の主観的な描写が、19例中8例もあった。また、性別では、女性のほうが男性よりも「なので」をやや多く使っている。

全体の数が少ないし、言い換えに関する判断にも、筆者の主観が作用していることは否定できない。そのため、断言はできないが、一般的な用法である「だから」に混じって、「なので」を使うことがかなり行われていることは間違いない。それも主観的な文脈で使われていることから、聞き手に対して押し付ける感じを避けようとする配慮が働いていると推測できる。

当初の予想については、「「なので」は、女性週刊誌、対談、インタビューなどの話しことばでは使われているのではないか」以外は、特に明らかにはならなかった。しかし、女性が「なので」を使う傾向と、聞き手への配慮という点については、今後、もう少し詳しく観察してみたいと考えている。

「めっちゃ」について

今 城 公 徳

電車に乗っていると、横に立っている女子学生の会話が聞こえて来て、その中で「めっちゃ」という言葉が何回も聞こえて来ます。それが耳につき、以前はあまり使われなかった言葉だと思い、自分なりに少しまとめてみました。

まず、「めっちゃ」を使う年齢層はどうか？性別は？地域によって違うのかを考えてみました。私の、親族、知人、教室（ウクレレ教室）の生徒、何十人かに質問しました。あまり母数が大きくないので統計上正確を欠くことをお許しください。

また、国語辞典に載っているかどうかをいろいろな国語辞典でチェックしてみました。

*

1. 「めっちゃ」を使う年代、性別、地域について

「「めっちゃ」と言う言葉をよく使いますか？」という質問をした。年代、性別と「使う」と答えた人数は次の通り。

10代、 女性、 3人中3人、 男性、 1人中1人。

20代、 女性、 5人中5人、 男性、 2人中2人。

30代、 女性、 5人中4人、 男性、 2人中1人。

40代、 女性、 3人中2人、 男性、 2人中0人。

50代、 女性、 5人中2人、 男性、 1人中0人。

60代、 女性、 4人中1人、 男性、 1人中0人。

合計 女性 25人中17人、男性 9人中4人。

年齢層では、予想通り若い人中心に多く使われている。十代、二十代の人ほとんど全員が使っており、年齢が上がるにつれて減って行き、四十代くらいまでは使う人が結構いる。何歳くらいまで使うかという、最近では五十歳以上でも使う人が増えているようである。

性別でみると、使うのは女性が中心で、男性で「めっちゃ」を使う人は、女性に比べて少し少ないようである。

次に地域で見ると、もともと関西の言葉なので（三省堂国語辞典）、使われるのも関西が中心であるが、次のような傾向が見られる。

東京……使う人は結構居るが、わざと関西弁を使ってふざける感じで使うことがあるのと、アクセントが関西のように、「めっちゃ」の「ちゃ」にあるのではなく「め」にあることがある。

名古屋…使うが、「めちゃんこ～」と言う人もいる（「めちゃんこやるぎゃあ」のように）。

九州……関西ほどではないが使う人はいる。「めっちゃ」でなく「めちゃ」が多い。

2. 国語辞典に載っているか

次に、いろいろな国語辞典を見て、「めっちゃ」という言葉が載っているかを、チェックしてみた。（それぞれ版と発行年月、解説文を記す）

○「めっちゃ」が載っている国語辞典

三省堂 国語辞典 第7版 (2014年10月)

(もと関西地方の方言) めっちゃを強めた言い方。

小学館 大辞泉 第3版 (2012年12月)

小学館 新選国語辞典 第9版 (2011年1月)

[関西地方の若者言葉とされる] 程度のはなはだしい様を表す。

岩波書店 広辞苑 第6版 (2008年1月)

(「めっちゃ」を強めた若者言葉) 非常に。度はずれた。とても。「一腹立つ」

三省堂 大辞林 第3版 (2006年12月)

小学館 日本国語大辞典 第2版 (2001年12月)

①めちゃくちゃに同じ。②程度の大きく甚だしい様子。③あばたのこと。(宮城県の方言で「目やに」のこと、福井県、岐阜県の方言で「眼病」を指す)

○「めっちゃ」が載っていない国語辞典

成美堂 実用国語辞典 第2版 (2015年5月)

旺文社 国語辞典 第11版 (2013年12月)

学研 現代新国語辞典 第5版 (2012年12月)

三省堂 新明解国語辞典 第7版 (2012年12月)

集英社 国語辞典 第3版 (2012年12月)

大修館 明鏡国語辞典 第2版 (2010年12月)

岩波書店 国語辞典 第7版 (2009年12月)

角川書店 新国語辞典 第8版 (2008年11月)

小学館 現代国語例解辞典 第4版 (2006年1月)

ベネッセ ベネッセ表現読解国語辞典 初版 (2003年8月)

集英社 広辞典 第5版 (2001年6月)

小学館 新解国語辞典 第3版 (1999年1月)

新潮社 新潮国語辞典 第2版 (1995年11月)

以上であるが、「載っている」とした辞典でも上記以前の次の版には載っていない。

小学館 大辞泉 初版 (1995年12月)

三省堂 大辞林 第2版 (1995年11月)

岩波書店 広辞苑 第5版 (1989年11月)

三省堂 国語辞典 第3版 (1989年10月)

これは、「めっちゃ」がほぼ2000年以降に出てきた言葉であることを表すと考えられる。

*

以上ですが、興味があるのは、「めっちゃ」が、一種のはやり言葉で、「ダサイ」や「ナウイ」などのように数年経つとだんだんと使われなくなり消えてゆく言葉ではないかと考えられることです。

滅茶苦茶(めちゃくちゃ)の、滅茶を字の通り普通に読むと「メッチャ」であり、「めちゃ」を強調したために本来の読みにもたまたま帰ったことになる。

以上

「超～」と「爆～」

宇野 秀和

1. はじめに

最近のあまり美しくないと思う言葉として「超～」と「爆～」をとりあげる。

2. 「超～」

2.1. 辞書の語釈

『広辞苑』第六版では、「超」の項目は次のような語釈がされている。

- ①（接頭語的に）⑦程度一杯をさらに超える意を表す。④「ウルトラ」「スーパー」などの訳語。②俗に、その語の内容をはるかに超えていること。③（接尾語的に）ある数値を超えることを表す。

ここでは、②の用法について取り上げることになる。

2.2. 「超～」の用例

よく見聞きする「超～」の用例としては、「チョー受ける」「チョー忙しい」「チョーヤバイ」「チョーウザい」などがある。筆者が実際に見聞きした用例を次にあげる。

- (1) 俗語辞典によると、1970年代に静岡で発生、云々とあり、1990年代に東京圏などで大学生から若者へ広がったという。今や半世紀を経ており、市民権を得ている。
- (2) 昨年11月、テレビのクイズ番組で、東大 v.s. 京大が対決する趣向のものがああり、そこで堀江貴文氏が返答できなかったときに「チョー悔しい」と言っていた。
- (3) 『現代用語の基礎知識』2013年版に「超高級化粧品」=資生堂の商品がセットで10万円するものがああった。また、2015年版には「超低カロリー」「超ダイエット」などが出現していた。
- (4) 高3の孫娘に尋ねたら、最初にあげた「チョー～」は最近あまり使わないとのことでああった。チョベリグ、チョベリバを教わった。

2.3. 「超～」についての所感

「超～」の望ましい表現としては、「とても」「いたく」「このうえなく」などの大和言葉がある。メールや手紙には、このような言葉が美しいと思う。

俗語辞典の記述や孫娘の話からは、若者言葉や流行語には寿命がああって、風化していくものだと思ふ。

堀江氏のような中高年が、こうした表現を使うのは見苦しい。

『現代用語の基礎知識』の記述から感じるのは、21世紀が女性の時代だということだ。ちなみに、「チョーヤバイ」は10代の9割までが「すばらしい」「良い」の意味で使っていると「朝日新聞 H.P.」で知った。「ヤバイ」の意味であるが大いなる驚きである。

若者の「チョー～」より商業、物理化学の形容詞として多用されている昨今、余りの多さに反論もない。

3. 「爆～」

3.1. 辞書の語釈

『広辞苑』第五版では、「爆」の項目には次のような語釈がされていて、第六版では②だけの意味になっている。

①はじけること。破裂すること。②爆弾・爆弾攻撃の略。

ここで取り上げるような語釈は載っていない。

3.2. 「爆～」の用例

「爆～」の語として有名なものに「爆買い」がある。主に中国人観光客が一度に大量の商品を買うことを指して使われている。この語は 2015 年、流行語大賞に選ばれた。2014 年頃から定着していたが、『現代用語の基礎知識』の 2014 年版には掲載されていない。2015 年版には、掲載されていないが、2016 年版には掲載されている。

その他、次のような用例を確認した。

- (1) あつと免税がより早く、爆速に！（日経 MJ、2015. 11. 13 の広告欄で、「あつと免税」はシステムソフトの商品名）
- (2) サンマ「爆漁」防げ（朝日新聞・2015. 9. 24）
- (3) 「爆クラ！」というクラシック音楽のリスニング&トークイベントを 4 年前から、ほぼ月 1 回のペースで続けていて（朝日新聞・2015. 9. 29、湯山玲子氏のコラム）
- (4) いま海外で爆売れしている日本製グッズってなんだ!？（読売新聞、2015. 11. 14、広告欄）
- (5) 爆走&爆笑&爆食！（MBSTV・2016 年 1 月 1 日、番組名「芸人キャノンボール」）
- (6) 爆生み（H. P.、中国、一人っ子政策から転換）
- (7) 谷崎の本を爆読みなさっているのでしょうか（2015. 7. 24、芦屋ルナホールで、たつみ都志氏が女優島田歌穂さんに）

3.3. 「爆～」についての所感

大丸松坂屋百貨店社長、好本達也氏が「「爆買い」という言葉はあまりいい響きじゃないですね」と述べている（読売新聞・2015. 11. 20）。私も関西にきて、「莫大なる～」「ドエライ～」を使ったことがあるが、「爆～」はあまり好ましい表現とは思わなかった。中国経済、GDP も減速しつつあり、「爆買い」は寿命が短いのでは？

4. おわりに

美しくない使われ方をしている流行語、若者言葉はいつの時代にもある。自分が好ましくないと思えば使わなければ良いことである。そして、幼少の頃、母から「言葉遣いが悪くなるのは不良の始まり」と教わった。言葉遣いは心遣いといい、その言葉を発する人の人となりを見わします。

ローマ字表記上の問題点

高田 秀峰

1. ローマ字と私

グローバル化の時代、2 回目の東京五輪・パラリンピックも見える中、来日者や日本語学習者の増加は確実だ。そこでローマ字だが、これこそ日本語の読みを表す唯一の適正な「発音記号」として使用可能と考える。日本語学習者（≠外国人）に発音を教える場合、ローマ字は有力な道具だ。仮名を知らなくてもローマ字が読み書き出来れば、音が伝達される。しかし、ローマ字の現状を見るに、大袈裟に言えば「暗澹たる」気持ちになる。例えば、ネット百科 Wikipedia には「ローマ字は和文の転写に過ぎず、元の表記が推察できさえすれば、誤りや乱れは特に問題とされない。ローマ字の正書法は、厳密には実践されていない」との記載が在る。そこでこの拙文をものすることとなった。

筆者（1949 年 12 月生まれ）の時代、ローマ字は小学校 3～4 年に授業があったと記憶する。週 1～2 時間か？もっとか？特に「ローマ字」というコマがあったのか？国語の一部の扱いだったか？覚えていない。テキストはもちろん別だが。

最初、結構苦勞しても覚えられなかった記憶はある。或る時、何かの切っ掛けで父親に教えて貰う機会が在った。母音と子音の組み合わせで理路整然と配置された 50 音表を説明され、何故これが理解出来なかったのか？不思議に思ったくらいだ。一旦、理屈が判れば後は簡単、長い日本語のローマ字化の宿題も、寧ろ楽しくこなした。また、自分の日記や作文をローマ字で書くのも楽しい作業であった。後年、父親の英文タイプを弄る機会があり、それでローマ字を打つのも嬉しいことだった。

ただ、疑問も残った。それは「ヘボン（ヘップバーン）式」と称する、「別の」50 音表が在ることだ。授業では、これは使わないので覚えなくてよい、とのことだった。後年、世間ではこちらの方が圧倒的に多用されていると知り、裏切られたような、理不尽な気持ちになったものだ。実際には、官庁などで公式に認められているのはあくまで「訓令式（日本式）」のようだが。

長じてサラリーマンとなり、更に何年も経った時、意外なことがあった。理科系の大学を出て技術職に就いている若手社員が、パソコンのローマ字入力は分かり難く、平仮名入力の方が楽だと言うのだ。あの時、父の簡明な説明がなかったなら、筆者も同じ状態だったかも知れないと思い、休日の数時間を費やしてくれた父に感謝した（筈だ、既に故人であったが）。しかし、このような人は案外多いのかも知れない。もちろん、我々の時代と異なるカリキュラムで習っているのだから、ローマ字には余力が入ってなかった（授業コマ数が少なかった）かも知れない。こういう人は、街やメディアに溢れるローマ字も読み難いと感じているのだろうか？英語を習う時、ローマ字での読みから類推するというようなこともしなかった（出来なかった）のだろうか？遅蒔きながら心配になる。

同じサラリーマン時代、唯一の海外出張がアメリカだった。相手先には” Mr.Hideo Takada” が行くと連絡されていた。ところが、筆者が持参・手交した名刺には” Hideo

Takata”と印刷されていた。日本では漢字が正式なので、それこそ「特に問題とされない」が、アメリカ人にとって“d”と“t”は間違いようの無い文字であり、従って”Takada”と”Takata”は「別人」となる。筆者はもう少しで出張先に受け入れて貰えなかったところだ。拙い英語で日本の慣習(?)を説明して理解されたようだったが。アメリカに連絡した担当者は、本人に確認せず自分の思い込みで作文したのだが、日本人がいかにローマ字を軽視しているかの証左かも知れない。アメリカ側にとってはこれしか頼るべきものはないのだが。因みに、筆者本人は名刺通り”Takata”として生きている。詰り、住民登録の振り仮名が「たかた」だ。

さて、本年は伊勢志摩サミット、リオ五輪+パラリン、4年後には2回目の東京開催、国を挙げてグローバルに「お・も・て・な・し」せねばならない。街に、観光地に「丁寧な」ローマ字の案内板などが増えるだろう。国交省か何処かは既に道路標識の英字表示内容の改訂工事を始めた、とのニュースもあった。しかし、それらが完成しても、全国で見ればほんの僅かな改良に過ぎないだろう。

問題は、これらの改良・改訂が、ローマ字の根本的表記方法＝正書法に就いては、全く触れられていないことである。今からでは間に合わないかも知れないが、この際、「新しいローマ字」を提案する。その動機は、現在のローマ字は問題が多過ぎ、来日者・日本語学習者に対し、不親切極まりないと考えるからである。筆者の極めて些少な「お・も・て・な・し」の気持ちである。

ただ、現時点では完璧な案とはなっておらず、要検討事項や新たな問題点を残している(筈だ)。これらをネタに議論されるなら望外の喜びである。

2. 現状の問題点

訓令式(例えば、じょ=/zyo/, /dyo/)とヘボン式(じょ=/jo/)が併存し、更にどちらでもない表記(じょ=/jyo/)も許容されている。詰り、書く人の自由裁量の部分が多過ぎる。日本人なら読めるが、日本語(の読み)を勉強する人には、余りにも不適切・不親切である。謂わば、ルールの無い「無秩序状態」で、これでは「ローマ字は言葉である」とか、「文字である」とか国際的に言えない。また、母音と子音の組み合わせで表現する英字の特長・メリットを、十分活用していない。

以下、問題点を書き出してみる。

- ① 「お」の長音の表記法が統一されていない。/o/, /ō/, /ō/, /oh/, /ou/, /oo/, なんと6通りもあり、余り見掛けないが/o-/(ハイフオン付き)もある。まさに「無秩序状態」である。特に、/o-/, /ō/やJRなどで採用されている/ō/は、英字以外の「記号」(ハイフオン・マクロン・サーカムフレックス)を使用している。
- ② 「な行」の子音/n/と、「ん」を表す/n/が同字になっている。これを区別する為に、/ ' /など英字以外の「記号」を使用せねばならない。
- ③ 使用しない英字/l/, /q/, /v/, /x/が在り、謂わば「勿体無い」状態。
- ④ ヘボン式では特定の使い方かしない英字/c(h)/, /f(u)/が在り、これも謂わば「勿体無い」状態。特に/f/は「は行」の「ふ」のみに使用し、違和感が大きい。
- ⑤ 日本人には発音が難しいとされる英語の/r/を、「ら行」に使用しているため、英語の/r/の発音に近いらしい、との誤解を与える。

- ⑥ ヘボン式の/ch/, /sh/は子音を表すのに英字2文字を使用しており、これも「勿体無く、効率の悪い状態。
- ⑦ 外来語（ほとんど英語）が多数日本に入って使われているが、その（日本語的）発音を十分表せない状態である。仮名では面倒な表記も英字なら簡単になることが多いが、英字のメリットが十分生かされていない。

3. 問題の解決に向けて

これらの解決のための腹案があるので、来年度の「オトナの日本語塾」で新しいローマ字表記法として提案したい。

古典落語の裾野展望

竹 腰 純

1. はじめに

平成 27 年 11 月 3 日武庫川女子大学言語文化研究所主催の言語文化セミナーが開催されました。「落語を楽しみ、寄席の言葉を知る」をテーマに天満天神繁昌亭 恩田雅和支配人の講演、笑福亭三喬師匠の落語、支配人・師匠・佐竹秀雄先生のパネルディスカッションの三部構成でした。80 名を超える参加があり、参加者に落語に関するアンケートをお願いしました。

2. アンケートの概要

2-1 アンケートのねらい

落語ファンの高齢化が言われています。古典落語が若いファン層にまで浸透するには何が必要なのでしょう。そのようなことを考えるヒントを得ようと思い、このアンケート調査を企画しました。

伝統芸能の中で比較的身近だと思われる落語に対して、参加者はどのように接しているのか、そして、ナマの落語をどのように楽しんだのかを知りたいと考えました。落語の身近さを知るために、落語と接する度合いや他の演芸に接する度合いとの違いを質問しました。また、落語を聴いて感じた魅力については、落語のまくらやストーリーなど、落語を構成する要素に分けて尋ねました。

また、年代による違いに言葉の問題があるのではないかと思い、落語に使われる語彙の認知度が、年代によってどう違うのかを調べてみました。

2-2 調査対象者の性別・年代

70 名（男 31 名、女 39 名）からアンケートの回答を得ました。その性別と年代の内訳人数は次の通りです。

表 1. 調査対象者の性別・年代別人数 () 内は%

年 齢	男	女	合 計
10～20 代	1 (3.2)	4 (10.3)	5 (7.1)
30～40 代	3 (9.7)	8 (20.5)	11 (15.7)
50 代	7 (22.6)	10 (25.6)	17 (24.3)
60 代	7 (22.6)	8 (20.5)	15 (21.4)
70 代以上	13 (41.9)	8 (20.5)	21 (30.0)
無回答		1 (2.6)	1 (1.4)
合 計	31 (100.0)	39 (100.0)	70 (100.0)

3. 調査結果

以下、その結果について、いくつかの観点から整理して報告します。

3-1 ナマの落語の体験

過去に落語を聞いたことがあるかとの問いには、寄席やホールで落語を聞いたことがある人は75%の53名（男26名、女27名）でした。50代以上では80%を超え、特に60代は全員の15名が「ナマ」の落語を聞いたことがあるという回答でした。落語を聞くのが初めてという人は3名（男2名、女1名）、何れも若い世代（10～20代2名、30～40代1名）でした。落語ファン年齢層の高さはこのセミナーにも表れていました。

3-2 他の演芸への関心

落語以外の好きな演芸について聞いたところ、漫才・コント・漫談が好きと答えた人が46名と群を抜いて多く、15名だった吉本新喜劇を大きく引き離しました。吉本新喜劇をあげた10名は10代から40代で、若い人の支持の高さを感じる結果となりました。

落語と他の演芸とではどちらが好きかとの間には、落語支持が40名で他の演芸支持の20名を上回りましたが、若い世代（10～40代）は、他の演芸支持が落語支持を上回りました。他の演芸支持の理由はテレビでよく見るが多く、漫才やコントを取り上げる番組の影響を感じる結果となりました。

表2. 落語と他の演芸のどちらが好きか？

	落語派			他演芸派			中間派		
	男	女	計	男	女	計	男	女	計
10～20代	0	1	1	1	2	3	0	1	1
30～40代	1	3	4	2	4	6	0	1	1
50代	4	6	10	3	3	6	0	1	1
60代	5	6	11	1	1	2	1	1	2
70代以上	9	5	14	2	1	3	2	2	4
合計	19	21	40	9	11	20	3	6	9

3-3 落語の魅力

当日の落語「月に叢雲」についてどこが面白かったかを、まくらやストーリーなどの構成要素に分けて質問しました（複数回答可）。その結果は、まくら、ストーリー、仕草、さげ、登場人物、間、その他の順に支持を集めました。

性別で比較しますと、回答なしを除いた女性29名は延べで110項目、つまり一人あたり3.8項目を選んだのに対して、男性19名は50項目で一人あたり2.6項目でした。また、全ての世代で女性が男性を上回りました。一般に女性の方がよく笑うと言われるし、寄席でもその現象が見られますが、それらの事実と対応する結果となりました。

また、落語支持者と他の演芸支持者を比較しますと、前者が面白く感じた部分は比較的

分散していますが、他の演芸支持者は 17 名中 16 名が「まくら」が面白かったと回答する結果となりました。13 (68.4)

表 3. 落語の面白かったところは？ () 内は%

	全：70人	性別		好みの演芸		
		男：19人	女：29人	落語：25人	他演芸：17人	中間：5人
まくら	36 (51.4)	13 (68.4)	23 (79.3)	16 (64.0)	16 (94.1)	4 (80.0)
ストーリー	32 (45.7)	11 (57.9)	21 (72.4)	18 (72.0)	10 (58.8)	4 (80.0)
仕草	26 (37.4)	7 (36.8)	19 (65.5)	13 (52.0)	9 (52.9)	4 (80.0)
さげ(オチ)	23 (32.9)	6 (31.6)	17 (58.6)	12 (48.0)	7 (41.2)	4 (80.0)
登場人物	22 (31.4)	8 (42.1)	14 (48.3)	14 (56.0)	6 (35.3)	2 (40.0)
間	17 (24.3)	4 (21.1)	13 (44.8)	7 (28.0)	6 (35.3)	4 (80.0)
その他	4 (5.7)	1 (5.3)	3 (10.3)	4 (16.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
合計	160	50	110	84	54	22
[無回答数]	[22人]	[12人]	[10人]	[15人]	[3人]	[4人]

3-4 落語に出てくる語彙

古典落語に出てくる言葉(24語)について知っているかどうかを尋ねた結果は、次の表の通りです。

全語知っていると答えた人は8名(11%)でした。男女に大きな差はみられませんでした。年齢による差は顕著でした。60歳以上では、平均語数は約19語でしたが、10~20代は10個以下でした。

周知されていた言葉の上位は、煙管(62名)、花魁(61名)、妾(61名)、廁(60名)、丁稚(60名)、下位は、おこも(24名)、雑魚場(25名)、矢立(26名)、節季(28名)、幫間(33名)、口入れ屋(38名)、へっつい(38名)という結果でした。

表 4. 落語に出てくる語を知っているか？ () 内は人数

	10~20代		30~40代		50代		60代		70代以上		合計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	(1)	(4)	(3)	(8)	(7)	(10)	(7)	(8)	(13)	(8)	(31)	(38)
煙管	1	2	2	10	7	5	7	8	12	7	29	33
花魁	1	2	2	9	6	5	7	8	12	8	28	33
妾	1	2	2	10	6	5	7	8	12	7	29	31
廁	1	3	2	10	6	5	7	8	10	7	26	34
丁稚	1	0	2	10	7	5	7	8	12	7	29	31
いとはん	0	0	2	10	4	3	7	8	12	7	25	29
後添い	0	0	2	9	5	5	6	7	11	8	24	30
手水	0	0	1	10	4	4	7	7	11	8	23	30
按摩	0	0	1	7	5	5	7	7	12	7	25	27
ご寮はん	0	0	2	9	4	2	7	8	12	7	25	27

雪隠	0	0	1	9	5	4	7	6	11	8	24	28
粗忽	0	0	0	5	3	5	7	7	12	8	22	29
小間物屋	0	1	1	9	4	5	6	6	10	8	21	30
藪入り	0	0	0	7	3	5	6	8	12	7	21	28
手代	0	0	0	7	3	5	7	7	10	6	20	26
鑄掛屋	0	0	0	5	2	3	6	7	11	6	19	22
愒気	1	0	0	4	1	4	7	6	8	7	17	22
口入れ屋	0	0	0	8	2	3	5	5	8	6	15	23
へっつい	0	0	0	6	2	3	5	6	7	8	14	24
幫間	0	0	0	5	1	4	7	2	9	4	17	16
節季	0	0	0	4	2	2	2	2	10	5	14	14
矢立	0	0	0	4	2	1	4	2	7	5	13	13
雑魚場	1	0	0	4	2	2	6	2	6	2	15	10
おこも	0	0	1	4	2	2	4	3	4	4	11	13
合計	7	10	21	92	88	178	148	146	241	157	505	605
年代別平均	3.4		9.4		15.6		19.6		18.9			

4. まとめ

古典落語は平成7年5月31日に国の重要無形文化財に指定されました。文化庁の解説文には「東西それぞれに特徴を有する古典落語は、磨かれた話術で一人の噺家がさまざまな人物を描きわけ独自の笑いの世界を構築するもので、高度な芸術的表現力を要するものであり、また我が国の代表的芸能の一つとして、芸能史上大きな価値を有するものである。」と記されています。

長い歴史の中で受け継がれてきた伝統芸能を、次の世代へ継承させることは容易なことではありません。演者側は子や弟子に継承しますが、聴衆側には明確な継承者は無く、継承する責任もありません。さらに言葉や風習の変化、技術の進歩などが重なり、若い世代と伝統芸能との関係はますます疎遠になりつつあります。「落語好き」が多かったセミナー参加者の中でも、17名(24%)が落語を理解するには知識があると答え、16名(23%)が一人でふらっと寄席に行くのには抵抗があると回答しており、若い世代だけに限らず聴衆側と落語との距離を感じさせる結果となりました。

しかし、この現象は反対に落語を知らない人に新たな感動や喜びを与える可能性を秘めていると捉えられます。最近、東京で若手噺家が出演する“初心者でも楽しめる「渋谷らくご」”が若い世代、特に女性の人気を集め活況を呈していると聞きました。このような流れと今回のセミナー並びにアンケート結果を総合すると、新たな落語ファンの開拓には「寄席、噺家、女性、まくら」が必須条件であると考えます。この四項目が落語における一汁三菜と言えるでしょう。もう一つ付け加えるとすれば今回のようなセミナーです。新たなファンの創成と、隠れたファンの覚醒に成果がありました。セミナー参加者の内56名(80%)が、その中でも10～20代は5名全員が繁昌亭で落語を聞いてみたいと答えています。

アンケートにご協力くださった皆様に感謝いたします。

開講場所：武庫川女子大学言語文化研究所 I-609

開講日時：

第1回 2015年5月23日(土)
10時30分～12時30分



第2回 2015年7月3日(土)
10時30分～12時30分



第3回 2015年9月12日(土)
10時30分～12時30分



第4回 2015年11月14日(土)
10時30分～12時30分



第5回 2016年1月30日(土)
10時30分～12時30分



企画・開催 岸本千秋（本研究所助手）
佐竹秀雄（本研究所研究員）
レポート指導 佐竹秀雄 岸本千秋
開催補助 森継真由（本学卒業生）
金田梨加（日本語日本文学科4年）

オトナのための日本語塾
レポート集 2015

刊行 2016年3月3日
編集 佐竹秀雄 岸本千秋
〒663-8558 兵庫県西宮市池開町6-46
武庫川女子大学言語文化研究所
電話 0798(45)3534
FAX 0798(45)3574
Mail ilc@mukogawa-u.ac.jp
URL <http://www.mukogawa-u.ac.jp/~ILC/>
発行 武庫川女子大学
印刷 大和出版印刷株式会社
